

資 料

1 国号「日本」の読み方について

三 宅 武 郎

目 次

- 1 「日本」という国号はいつごろから始まったか……………68
- 2 「日本」の語原的意味はどうであるか……………73
- 3 「日本」を「ひのもと」と読んで
国号としてはどうかという意見について……………74
- 4 はじめは「ニホン」と発音したか
「ニッポン」と発音したか……………81
- 5 「日本」の読み方を国家的に決めたことがあるか……………83
- 6 文部省で正式に「日本」の読み方を決めたことがあるか…87
- 7 将来統一の見込があるか……………91

1 「日本」という国号はいつごろから 始まったか

これについては、古来、歴史の専門学者の間に諸説があつて、今日のところ、まだ定説というものはないようである。したがつて、ここにはただ大体のことを紹介しておくだけである。

推古天皇の摂政聖徳太子（摂政593—621）のときには、まだできていなかった（注1）。太子が、外交上、国号の制定を必要とされていたことは史上に明らかなところで、当時、遣隋^{ずい}の国書に「日出処^{ひでし}天子」または「東^{あづま}天皇」と書かしめられたことは、その苦心の現われにほかならない（注2）。その後、大化改新（646）のときに「日本」という国号も制定されたと考えられないことはないが（注3）、その説のよりどころとなっている大化元年、高麗^{こま}・百濟^{くだら}の使に宣せられた詔の冒頭に「御宇日本天皇」とあるのは、後の令制（詔書式）をいにしえにめぐらした書紀の例の筆法といわれても、一応いたし方のないところがあるので、これはしばらくおくとし、最も確実なところでは、近江令（注4）を修正した大宝令（注5）それをさらに再修した養老令において、とくに外交上の用語（注6）として「日本」の国号が制定されているといえるだけである。そして、その養老令が公布された養老2年の2年後の養老4年（720）に成った国史の第1書には「日本」の名を冠し（日本書紀）、かつその書中、従来の「倭^わ」の字はす

べて「日本」に書き直して、これを「やまと」と読むべきことを注記してあるから（注7）、ごく大ざっぱにいても8世紀の初頭には「日本」の国号が字面的に確定し、かつ、その読み方は「やまと」であったと言ってよいわけである。

中国でもその時代以後、「日本」という国号を公式に認めて、それまでの倭^わの呼称を廃し（注8）、かつそれから彼国の人の詩文にも多く「日本」の語が用いられるようになったのである（注9）。

そして、もとの「倭」は後に「和」の字に書きかえて、和国・和歌・和語・和訓・和製・和英（辞書）などに用いている。また、これに大の字を冠して「大和」と読み、大和魂^{やまとだまし}・大和心^{やまとこころ}・大和なでしこなどの語にも用いる。

一面、畿内^きのやまとの国にも大の字を冠して大倭^{おほやまと}・大和^{おほやまと}ともいったが（注10）、今日では「大和^{やまと}」というふうに一定している。

〔注1〕 聖徳太子の時代にまだ「日本」と熟字した国号がなかったことは、太子の法華義疏^{ほつげ ぎしよ}のそでがきに此是大委国上宮王私集^{ハレ ノ ノ ノ ナリ}、非^ズ海彼本^{ノ ニ}とあるのによって確証される。

「委」は「倭」の本字であるが、また「倭」の略体と考えるとさしつかえない。

〔注2〕 日出処^ニ天子うんぬんという国書の文句は、わが国の史書にはのっていないで、かえって中国の史書にのっている。

大業三年、其王多利思比孤^{ツノ タ リ シ ヒ コ}、遣^{シテ}使^ヲ朝貢^ス。…其^ノ国書^ニ曰^ク。日出^{ツル}処^ニ天子、致^ス書^ヲ日没^{スル}処^ニ天子^ニ無^シ恙^{云々}。帝覽^ミ之^ヲ不^レ悦^イ、謂^フ鴻臚卿^ニ曰^ク、蛮夷^イ書、有^ラ無^レ礼者^{ナカ マタ}勿^レ復^ニ以^テ聞^{スル}（隋^{ズキ}）

書倭国伝)

隋^{ずい}の煬帝^{ようたい}の大業3年(607)は推古天皇(聖徳太子摂政)の15年で、その時の使は小野^{いもこ}妹子であった。翌年、再び妹子を隋につかわす。

日本書紀(推古16年)には、そのときの国書の文句を次のようにしるしてある。

東^{あづま}天皇、敬^{てい}白^{はく}西^{せい}皇帝^{こうてい}ニ

〔注3〕 本居宣長：国号考

〔注4〕 近江令^{おうみりよう}は天智天皇の遺制で、持統天皇(天智天皇の皇女で天武天皇の皇后)の3年(689)に公布された。

〔注5〕 大宝令^{たいほうりよう}は近江令を修正改編したもので、天武天皇の5年(大宝元年701)に公布された。しかも歴朝、これを天智天皇の遺制として尊重されているのである。参考：——

近江ノ大津ノ宮ニアメノシタシロシメシ^{オホヤマトネコ スメラミコト}大倭根子^{オホヤマトネコ}天皇ノ、
^{アメツチ}天地ト共ニ長ク、日月ト共ニ遠ク、カハルマジキ常ノ^{ノリ}典ト立テ
タマヒ、敷キタマヘル^{ノリ}法ヲ、受ケタマハリテ行ヒタマフ(奈良
朝第1代元明天皇の即位の宣命)。

天智天皇、始^{はじめ}テ制^{せい}法令^{ほうれい}ニ。謂^い之^を近江朝廷^{おうみてい}之令^{のれい}ト。天下百世因^よニ
准^{したが}之^をニ。(江家次第^{かうけしだい})

平安朝における十陵の制度では、天智天皇の陵を第一におかれた。それを宣長は慨して、「神武天皇の陵をこそ第一に厚く祭りたまふべく」といっている(古事記伝二十)。

かように考えてくると、この「日本」の国号も、実質的には、

やはり天智天皇の遺制の一つとして、近江令発布の年（689）まで12年をさかのぼって考えてよいとも思われるが、さらに精神的には聖徳太子の遺業だともいってもよいであろう。

〔注6〕 公式令詔書式の「明^{アキツミカミトアメノシタシロシメス}神^{ミコ}御^ミ宇^ミ日本^{ヤマト}天皇詔旨」を
謂^イフコ^コロ^ハ以^テ大事^{マヒ}宣^スル^ニ於^ニ蕃^{ばん}国^{クニ}使^シ之^ノ辞^ギ也」^ギと義解してある。

これは用^{モチキル}ニ於^ニ朝廷^{テイテイ}大事^{マヒ}之^ノ辞^ギ（即^チ立^テ皇^{ミコ}后^{ミコ}・皇^{ミコ}太子^{ミコ}及^{マタ}元^{ハジメ}日^ヒ受^ケル^ニ朝^{アサ}賀^ガ之^ノ類^ル）たる「明^{アキツミカミトシロシメスオホヤシマ}神^{ミコ}御^ミ大^{オホ}八^{ヤシマ}洲^{スメラミコト}天^{アメノ}皇^{ミコ}詔旨」に対するものであるが、その「御宇日本」の読み方いかんによって、日本の国号制定史観に影響してくる。が、そこまではこの小稿ではふれないでおく。

〔注7〕 日本^{コホニイウ}此^{コノ}云^{イハレ}耶^ヤ麻^マ騰^ト下^{ナラウ}皆^{ミナ}倣^{ナラフ}之^ノ（日本書紀卷一注）

〔注8〕 大宝3年（703）遣唐使粟田^{あわだ}真人^{まひと}が、その高潔、神のごとき儀容・進止をもって「日本国^{ヤマト}使」と名のり、唐廷（時に則天武后の長安3年で国号を周と称した。）の君臣・上下をして歎美おくあたわざらしめたうちに、よく「日本」の新国号を承認せしめたと認めてよいであろう（文武紀）。中国の正史（新旧の唐書）でも、このときの記事から旧来の「倭国伝」が「日本国伝」にかわっているのである。

勅^{スメラミゴト}日本国王主明^{ミナモト}樂^{ラク}美^ミ御^ミ德^{トク}（勅書案：張九齡——玄宗の時代）

日本国^{ヤマト}者^ハ倭^{ヤマト}之^ノ別^{ワケ}種^{シユ}也。以^テ其^ノ国^ノ在^ニ日^ノ辺^ニ故^ニ、以^テ日本^ノ為^ス名^ト。或^ハ曰^ク、倭^ノ国^ノ自^ラ惡^シ其^ノ名^ヲ不^レ雅^{ナラ}、改^メ為^ス日本^ト（旧唐書日本国伝）

日本^ノ古^ク倭^ノ奴^ノ也。…隋^ノ開^ノ皇^ノ来^リ、始^ニ通^ス中^ノ国^ニ

咸亨元年，遣^レ使^ヲ賀^シ平^ニ高麗^ヲ，後^ニ稍^キ習^シ夏音^ヲ，惡^シ倭^ノ名^ヲ，更^ニ号^ス日本^ト。使者自^ラ言^フ，国近^ニ日^ノ所^ニ出^{ヅル}，以^テ為^ス名^ト。
(新唐書日本国伝)

〔注9〕 日本^ノ晁卿^{チヨウケイ}辞^シ帝都^ヲ征帆一片^{メグ}繞^ル蓬壺^{ホウコ}明月^ハ不^レ歸^ラ沈^ニ碧海^ニ白雲秋色満^ニ蒼梧^ニ (李白)

送^ル僧^ノ歸^ル日本^ニ (方千——文苑英華)

〔注10〕 畿内^キの大和^{ヤマト}の国を古く大和^{オホヤマト}とも称したことは倭名類聚^{ジヨシヨウ}鈔の国郡の巻に「大和^{オホヤマト}於保夜万止」とあるのによってもあきらかであるが，なお，それよりも小さい地方名としても山辺郡^{オホ}に大和^{ヤマト}があり，これは延喜式所見の古名である。

畿内^キの一国，帝都^{ヤマト}の所在地としての大和^{オホヤマト}をも，もとの倭^{ヤマト}に大^{オホ}の美称を冠して大倭^{オホヤマト}と呼び（おそらくは公式的なものであったろう），それを聖武天皇の天平9年12月に大養徳^{オホヤマト}ノ国と改め，さらに天平19年3月に再び大倭^{オホヤマト}国の旧字に復した（続日本紀）。その大倭^{オホヤマト}をさらに大和^{オホヤマト}としたのは天平勝宝4年の11月の4～25日の間と推定されている。それは同年11月3日に藤原永手を「大倭^{オホヤマト}守」となすとあり（続日本紀），そして万葉集19巻（4277番）の歌の作者を「大和^{オホヤマト}ノ国守藤原永手」とあるのによる（本居宣長：国号考和の字の項）。

日本書紀には畿内^{ヤマト}の大和^{ヤマト}にも日本の字をあてている。たとえば日本^{ヤマト}ノ国^{ミムロ}之三諸山（神代巻）など。その他，神日本磐余彦尊^{カムヤマトイワレヒコノミコト}や日本武尊^{ヤマト}の日本もそれである。

2 「日本」の語原的意味はどうであるか

聖徳太子の「日出処」というのとまったく同じ意味である。けれど「日本」は「日のもと」であり、その「もと」は「源」の^{みなもと}「もと」と同じ意味である。すなわち「みなもと」は^{みなもと}水之原＝^み水^{なもと}之本の意味である。元来「源」は「原」が本字であり(注11)、それに後世サンズイをつけたのであるが、あたかも「然」ですでに「もえる」という意味の字であるのに、さらに火へんをつけて「燃」としたようなものである。そして「原」は「本ナリ也」と訓じて、すべて「もと」すなわち物の本原という意味である。そこで漢和大字典に「源」は「水泉の流れ出づる^{もと}本、みなかみ。」と解釈してあるが、これに準じて説けば、「日の本」は「日の出づる本、ひなかみ。」というわけである(注12)。つまり水源地に対する日源地ともいうべき心持での「日出処」というのが、すなわち「日本」という熟字の意味だと考えてよい。それもひっきょう日本人に自ら東方日出の国にいるという自覚があり、おのずから「日の本のやまとの国」と歌い上げた高まいな気はくにもとづくのであろう(注13)。

もっとも「日の本」というのは「やまと」のまくらことばであって、それだからこそ「春日のかすが」^{はるひ}「飛鳥のあすか」^{とぶとり}から「春^{かす}日」^が「飛鳥」^{あすか}という熟字訓の用法ができたのと同じ趣で、これも「日本のやまと」から「日本」^{やまと}という熟字訓もできたのであるとし、はじめから「日の本」という国号があったというわけではな

い（もしそういう語があったとしたらそれは先住民族に関係のある称呼であろう）。

〔注11〕 「^{けん}原」は、もと「^{がけ}厂」の下に「泉」を書いた字で、そのナカヅクリの「泉」は実は「泉」の字が略された形である。また「燃」も「然」の下のヨツテンが火であることが忘れて、それにさらに火ヘンをつけて、火にもえるという意味がよくわかるようにしたのである。

〔注12〕 「みなかみ」が「みなもと」よりも語感が古いように、「ひなかみ」が「ひのもと」よりも語感が古い。それは「みなかみ」および「ひなかみ」が「みなもと」および「ひのもと」よりも1時代古くおこなわれた語であるということを暗示しているのであろう。

〔注13〕 万葉集三（319 番）詠不尽山歌

ひのものと の やまとのくにの しづめ
日本乃 山跡国乃 鎮とも ゐます神かも 宝とも なれる
山かも ^{するが}駿河なる 富士の高嶺は 見れどあかぬかも

3 「日本」を「ひのもと」と読んで国号と

してはどうかという意見について

これから新しくそう読むことにきめればともかく、これまでのところでは「日本」は「ニホン」または「ニッポン」と音よみすべきである。

日本の国家統一は大和朝廷の力によるもので、しぜん「やまと」というのが統一国家の総名ともなったのである。ところが、それ

に対して古くから「倭」の字をあて、さらにこれに「大」の字をつけて「大倭」とも書いて「おほやまと」と読んでいたのを、後に「日本」という熟字にかえたまでのことであるから、その当時はもとのままに「日本^{やまと}」と読み、一面、字音では「日本^{にほむ}」というようにも読んだことであろう。早い話が日本書紀の書名など、おそらく音よみしたのではあるまいか。

後世、歌ことば（または文^{ふみ}ことば）としては「日本」を「日の本」といっているが(注14)、実際の話しことばとしては「日の本」とはいわなかったらしい。その点、神皇正統記にはっきりと「ひのもと」とは読まずといっているのは鉄案である(注15)。いやそれどころでなく、ある時代には、実際の話しことばとして「ひのもと」といえば、それは意外にもエゾのことであったのである。

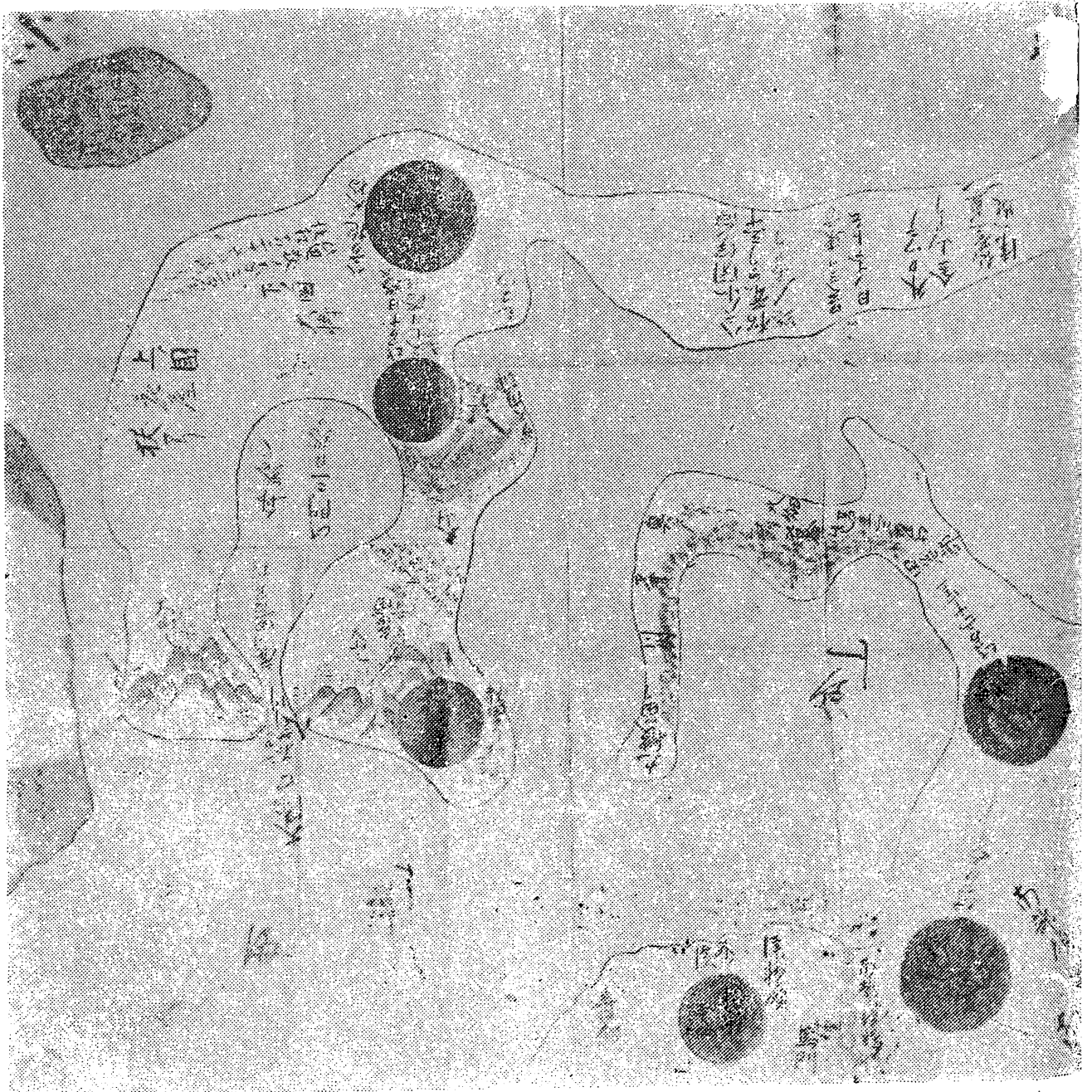
小だわらのことは、くわんとう・ひのもとまでのおきめにて候
まま、ほしころしに申つく可^べ候間、としをとり可申候。（豊太
閣真蹟集第25葉一ワキマル筆者）

これは秀吉が例の自ら「てんか」（殿下のかながき）と署して京都なる「大まんどころ」（夫人の大政所）あてに送った天正18年「5月1日」づけの手紙の1節である。この「くわんとう・ひのもと」の「ひのもと」とは、関東に対して関東以北の地、むしろ北辺エゾの地までを含めていると解釈するよりほかに道がないようである(注16)。

大日本地名辞書所引の史料によると(注17)、むかし津軽の安東（または安藤と書く）氏が、エゾを征討した功によって、日本将^{ひのもと}

軍（または日下^{ひのもと}將軍と書く）と呼ばれている。

人国記というのは元祿年間に世に出た諸国風俗物語であるが、その陸奥の国の条に「コノ国ノ人ハ、日ノ本ノ故也(注18)、色白クシテ眼ノ色青キ事多シ」とある。



寛文蝦夷図 《国史館蔵》

函館図書館蔵の寛文蝦夷図には、松前から30日行程のところに「是ヨリ東ノ方、日ノ本ト云^{イノ}」とあるが(注19)、それを今日の地図に引きあててみると、ちょうど日高の国あたりにあたっているのは、はたして偶然の一奇であろうか(注20)。

北海道の古名は越^{コシノワタリ}渡島である(文武紀)。また越^{コシ}ノ洲^{シマ}である。(古書記)。その越は越の通音で、そのヲチ島^{ヲチ}がヲ島^{しま}となって、後に渡島^{ヲシマ}(日本紀古訓)と読むようになったものと考えられる(注21)。

さてエゾには古く大別して3種があった。すなわち景行紀にいわゆる津軽エゾ・ニギエゾ・アラエゾ、または諏訪大明神絵詞(続群書類従第3集所収)にいわゆる渡り党・日の本・カラコなどである。大日本地名辞書に種々の伝説を合考して、

てき
狄種の一に、中古、ヒノモトてふ者の存在せるを会得するに足らん。(北海道6ページ)

といっているのはけだし動かないところであろう。また倭訓栞にいう。

俗諺に、奥州日の本の称あるは、日本紀に、東夷之中、有_二日高見国_一といへる意なるべし。

その他、金田一博士の説など(注22)。

これらの資料によって考えると、上記、秀吉のいわゆる「ひのもと」とはエゾの種族名ないし地名であること疑いないが、それはあるいは当時の東日本的な方言であったのではあるまいか。そして方言こそは生きた話しことばであって、その点、上記の歌ことば(または文ことば)としての「日の本」とはまったくその性

格を異にしているものである。

かつて、中央語（すなわち標準語的なもの）としては、エゾはエゾであり（今日アイヌというように）、それを「日の本」とは恐らく一般にはいわなかったのであろう。そしてもし「日の本」といえば、それは国号「日本」の歌ことば（または文ことば）としての修辭的表現にすぎないものであった。そして、真に生きた話しことばにおける日本の国号は、むかしは「日本^{やまと}」であり、中古以後は「日本^{にほん}」または「日本^{につぽん}」であったと思われる。かくしてわが「日本」の国号は、その文字どおりに「日の本」すなわち「日の出づる処」という意味であって、それは8世紀の初頭（実質的には7世紀の末か）にできたものであるにしても、その思想的ないし歴史的な源は意外に遠く、かつ意外に深いものがあるかもしれないと思われる。が、それはもう筆者などの立ち入るべき領域ではないので言及をさしひかえる。

されば「日の本」とは、歌ことば（または文ことば）としては別であるが、話しことばとしてはエゾを意味する1種の時代的方言であるので、標準語としての日本の国号は、古語では「やまと」であり、中古以後では「日本」を音よみにした「ニホン」または「ニッポン」である。それがすなわち国号「日本」の読み方における標準語的性格ともいうべきものであろう。

〔注14〕 ひの^ひも^もと^とにはさらに御覧じうることなし。

（源氏物語薄雲）

いとむつかしきひの^ひも^もと^との末の世に（同若紫）

わが国は天照る神の末なれば日の本としもいふにぞありける

藤原良経 （玉葉集）

日のもとに咲けるさくらの花みれば人の国にもあらじとぞお

もふ

平兼盛 （拾遺集）

〔注15〕 字のままにひのもととは読まず、やまとと訓ぜり。（神皇正統記神代）

また本居宣長も同説である。

比能母登^{ヒノモト}といふ号は古の書に見えず。日本^{ニホム}といふは、意はその意なれども、もと異国へしめさむために設けたまへるなれば、ひのもととはよまず、始めより爾富牟^{ニホム}と字音にぞいひけむ。（国号考）

ちなみに「本」の n 韻を m 韻に読むことは、任那（任nin）を mi mana, 小野妹子^{いもこ}（imoko）を因高^{いもこ}（因in），文（fun）をfumi とするの類で、くちびる音の盛行した時代があったことを物語るが、その流れの一つの現われと見てよいであろう。

〔注16〕 秀吉は同じ小田原陣からの消息（豊太閣真蹟集第24葉）に、国号の「日本」を「二ほん」と書いている。また他の消息（同上第18葉）には「にほう」と書いている（その「う」は「ん」の音——この「ん」は〔ng〕にあたる——を示す）。一面、秀吉の右筆が書いた組屋文書（推定文祿5年の5月18日づけ）には「につほん」とあるから、たぶんかれらも「ニホン」と「ニッポン」とを両用していたのであろう。

それにしても秀吉が国号の「日本」と奥州「ひのもと」とを

区別していたということは注意されてよい。

〔注17〕 大日本地名辞書4716—7 ページ，同北海道6 ページなど。

〔注18〕 史籍集覧第17集所収，伴信友校本。この「故也」は「故ニヤ」の意か。板本には単に「に」とある。

〔注19〕 函館図書館蔵。写真は昭和13年9月21日同館（岡田健蔵館長）から恵与されたもの——ここに深く感謝の意を表する。

〔注20〕 松浦氏命名案内（大日本地名辞書 240 ページ所引）参照。

〔注21〕 これは私見の渡島語原説である。

〔注22〕 金田一京助：蝦夷と日高見国（大正15年刊「アイヌの研究」所収）ちなみに「みなもと」と「みなかみ」とが一对の同義異語であるように，この「ひのもと」と「ひなかみ」ともまた一对の同義異語である。そして「ひなかみ」が「ひたかみ」ないし「きたかみ」の名で，はじめ大和（大倭日高見^{おほやまとひだかみ}国一大^{おほ}祓^{はら}詞^{ひことば}）から常陸（此^{ひたち}地本^{ちもと}日高見^{ひたかみ}国也一常陸風土記）に東遷し，そこから針路を転じて東北，北上川の流域（東夷之中有^ニ日高見国^ニ一景行紀）へ移動しているが，それがまたふしぎにも，上記の「日の本」の地名が，同じく大和（日本之山跡国^{ひのもと の やまとのくに}一万葉集——このまくらことばも地方の大和の名とともに全国的な総名になったのではあるまいか。）から東北（秀吉の関東^{ひのもと}とまたは津軽の^{ひのもと}と將軍）へ，そこからさらに海を渡って北海道・千島へと，しだいに移動して行ったのと常に形影あい伴っている。これは，あるいは「日の本」の民族的移動のあとを示すものとも見られるであろう。

4 はじめは「ニホン」と発音したか

「ニッポン」と発音したか

それは未詳であると答えるよりほかはない。

ただ、ここで一言注意しておきたいことは、日本語のハ行子音が古くは p 音であったという説の一端だけをきいて、まん然と「日本」もはじめは「ニッポン」と読んでいたのであろうというように考えることが誤りであるということについてである。

なるほど、ハ行子音が古く p 音であったということは、今日、ほとんど学界の定説となっているが、その〔p〕から〔f〕への移りかわりの時代については、まだ明らかにされていない。すなわち、あるいは奈良朝以前と想定し(注23)、あるいは奈良朝を転換期かとし(注24)、あるいは奈良朝またはそれ以前かとしているのである(注25)。だいたいにおいて伝統的な国語学者は奈良朝における p 音の盛行を疑っているのであって、おそらくはそれが正しいであろう(注26)。そして「日本」の国号制定が奈良朝の初頭または直前にあたるのであるから、いきおい、これまでのところでは「ニッポン」説は影がうすいのである。ただし反対に「ニッポン」説を採っている新しい意見もあるし(注27)、そのへんの消息はやはり未詳といっておくべきであろう。

〔注23〕 上田万年：P音考（明治36年刊「国語のため第二」所収）

〔注24〕 安藤正次：古代国語の研究（大正13年刊）

〔注25〕 橋本進吉：波行子音の変遷について（昭和3年刊「岡倉

先生記念論文集」および昭和25年刊「国語音韻の研究」所収)

〔注26〕 私見では、もっとさかのぼった時代まで疑っている。

「日本」の読み方なども「涅槃^{ねはん}」の例で、どちらもはじめから「ネッパン」「ニッポン」ではなくて「ネハン」「ニホン」であったのではないかと考えている（その「ン」の発音は別の問題として）。

〔注27〕 岩井大慧：日本国号私見（昭和14年刊「東亜学第1集」所収）

吉田澄夫：室町時代以降における国号呼称（昭和19年刊「橋本博士還暦記念国語学論集」所収）

ところで、奈良朝以前のことはしばらくおき、平安朝にはいつてからはどうかというに、それはもうほとんど学者の間で異論なく一般的に「ニホン」であったろうと考えられている。そして、それから院政・鎌倉と過ぎて室町時代になると、新興の東国的発音によって「ニッポン」ということが多くなり(注28)、さらに戦国の世を経て織豊時代になると、その傾向がいっそう強くなったのではあるまいかと考えられている。当時のキリシタン文献によってみても、ローマ字書きでは Nippon のほうが Niffon または Nifon よりも、断然、多いようである(注29)。そして新村博士その他の研究によれば〔f→h〕の変化は江戸時代にはいつてからである(注30)。

しかも、旧来の「ニホン」「ニッポン」という二つの発音は絶

えることなく、たとえば漢字をめぐる音と訓とのような関係で、国号「日本」をめぐる二つの読み方として久しく国民の間に用いられて今日にいたっているのである。

〔注28〕 一般につまる音便が中央語にあらわれた時代である。

〔注29〕 前掲、岩井大慧「日本国号私見」および吉田澄夫「室町時代以降における国号呼称」参照。

〔注30〕 新村出：波行子音の変遷に就いて（東亜言語志叢考）

5 「日本」の読み方を国家的に決めたことがあるか

それはまだない。それについて重要な参考となるのは、憲法における「日本」の読み方について、先年、帝国憲法改正の委員会で井上（徳命）委員から質問があり、それに対して金森国務大臣から答弁があった。これはいろいろな意味で記録的なものであり、かつ委員会の議事録は広く一般には読まれていないので、この機会に転載しておくことが有益であると思う。

昭和21年7月12日（第10回）

○金森国務大臣（上略）日ト本ト国トヲ書キマシテ、之ヲ我々ガ読ム時ニ「ニホン」国ト読ムコトモアルシ「ニツポン」国ト読ムコトモアルト云フコトハ、我ガ国ニ於キマシテ通念トシテ認メラレテ居ル所デアリマス。其ノ二ツノモノニ遽ニ區別ヲ付ケル必要ガナイ、若シモ是ガ、此ノ二ツノモノノ中ノドツチガ宜イカト云フコトヲ決メル、慣習的ニドチラカヲ助長発達セシム

ベキモノデアルトスルナラバ、今後、特ニ十分ナル研究ヲ積ンデ宜カラウ、斯ウ考ヘテ居リマス。現在見マシテモ、国民ノ声ガ自然ニ現ハレテ来ル地名等ニ付テ見マシテモ、「ニホン」橋ト言ツテ居ルトコロモアレバ「ニッポン」橋ト言ツテ居ル所モアリ、「ニッポン」銀行ト「ローマ」字ニ書イテ居ル所モアレバ「ニホン」銀行ト「ローマ」字ニ書イテ居ル所モアリマシテ、之ニ依ツテ特別ナル不自由ハ生ジテ居ナイヤウニ思フノデアリマス。日ト本ト書イテ「ニホン」ト読メルノカ読メナイノカ、是ハサウ云フ方面ノ学説ニ聴カナケレバナリマセヌケレドモ、私共ノ確カニ知ツテ居ル知識ニ依リマスレバ、日ト本トヲ書イテ「ニホン」ト読ムト云フコトハソソナニ不思議ナコトデハナイ。（中略）随テ今御答ヘ致シマス所ハ、今日ノ所デハ何レトモハツキリ決メテ居リマセヌ。ドチラデモ宜シイ、斯ウ云フ態度デ居リマシテ、尚ホ御教ヘヲ受ケマシテ然ルベキ方向ニ動く機会ヲ作りタイ、斯ウ考ヘテ居リマス。

さらに、この機会に、いま一つ議会の記録を転載しておきたい。それはさかのぼって昭和14年の第73回帝国議会の建議委員会における佐藤（与一）議員提出の「我が国号ノ称呼統一ニ関スル建議案」に対する樋貝政府委員の答弁である。そこに多少とも内容にふれた点が見られるからである。

○樋貝政府委員（上略）昨年ニ於キマシテモ内閣方面ヤ外務省ヤ文部省方面トデ共ニ此ノ研究ヲ進メテ参リマシタ。此処ニ研究ノ結果ガ沢山ナ書類ニナツテヨリマスガ、何分ニモ今仰セラレ

タ通りニ事が相当重大デアリマシテ、（中略）之ヲ公ノ機関ニ掛ケテドウ云フ風ニ決スルト云フ所マデハ、遺憾ナガラマダ参ツテ居リマセヌ。引続イテ是モ解決致シタイト云フ考ヘデ居リマスガ、（中略）唯其ノ内容ガ、当方ニ於キマシテモ、「ニツポン」トスベキカ「ニホン」トスベキカト云フヤウナコトニ付キマシテハ、余程考慮致サナケレバナリマセヌ。今マデ研究致シマシタ所デモ、先ヅ沿革的ナト申シマスカ、我国古来発達シテ参ツタ過程ニ顧ミマスト、「ニホン」ト云フ発音ノ方ガ相当デアルト云フヤウナ結論ニナリマスケレドモ、一方、外国語ナドノ関係及ビ今日「ニツポン」ト云フ称呼デ相当広ク行ハレテ居ルト云フヤウナ点、ソレカラ或ル場合ニ力強ク表現スル場合ナドヲ考ヘマスト、「ニツポン」ト云フ風ニ発音シタ方ガ相応ハシイト云フヤウナコトモ考ヘラレマス。（中略）サウ云フヤウナ事情デアリマスノデ、内容ニ付テハモウ一步篤ト研究致シマシテ、其ノ上ニ決定ノ方法ヲ執ツテ行キタイト云フ考デアリマス。

さて最後に、政府の公的見解を示した最新の総理大臣の国会答弁を次にかかげておく。最新といっても昭和22年9月20日づけのもので、それは同年8月26日づけ姫井（伊介）参議院議員から提出された「国名正称に関する質問主意書」に対する片山（哲）内閣総理大臣の答弁書である。しかもその文意があらかじめ質問書を見ておかないとはっきりしないところがあるので、それらの二つの文をともにかかげておく。

国名正称に関する質問主意書

固有名詞は各国を通じて正しく称えられなければならぬ。然るに国名の称え方が非常に乱れている。例えばアメリカを米国、イングランドをイギリス又は英国などと俗称する如きことであって、これは国際上にも、教育上にもはなはだ当を得ざることである。

一、各国の国名は、今後、正しく^{とな}称えるようにすべきではないか。

なお、これについて、日本は、国際的にはジャパンと通称されているが、民主的文化国家として新らしく建設される日本は、今後……

一、日本をニッポン（一略一）と正称せられるように、関係^{りよう}方面の諒解^うを得べきではないか。

答 弁 書

各国国名の呼称が統一されることは望ましいのであるが、国際間における用法としては、現に慣行がほぼ確定しており、又法令等においても、できるだけこれを統一してゆきたいものとする。その他の場合における国名の呼称については、強いてこれを統一するほどの必要もないことと思う。

次にわが国名の呼称についてであるが、現在のところ、これを「ニッポン」と読むも「ニホン」と読むも、にわかに何れを誤りとも断ずることはできないと思う。^{しかのみならず およ}加之、凡そこの種の呼称は、民族の歴史、伝統等によって^{おのずか}自ら定まるべきもので、

これを人為的に固定しようとすることは、必ずしも当を得た態度と称し難いという考え方も成り立つと思う。今日の問題として、我が国名の呼称の変更を関係方面に向って要望することについては、なお充分なる考慮を要するものとする。

以上。これ以後、この問題に関する国会での質問、応答はない（昭和33年2月21日現在）。

6 文部省で正式に「日本」の読み方を決めたことがあるか

特別に省議で決めたことはないそうである。ただ、昭和9年3月19日、時の臨時国語調査会において次のような案を議決したことがある。

国号呼称統一案

ニッポン又はニホンと呼び来れる国号の呼称は爾今ニッポンに統一すること

ただし固有名称にしてニホンと呼ぶ習慣あるものは従前の通

ニホンバシ ニホンギ
日本橋 日本紀の局

又外国へ発送する書類には国号に

Nippon を 用い Japan を 廃すること。

この決議は、同月22日および23日の新聞・ラジオで大きく報道され、さらに同月25日の東京日日新聞には、同会の幹事、文部省図書局編集課長藤岡継平氏の談話が載っている。その要旨は次のとおりである。

(1) 古式の発音は「ニッポン」と力強く発音していた。したがって日本書紀も「ニッポンシヨキ」と読むのが正しい(注31)。

(2) 従来でも公式にはたいてい「ニッポン」が用いられている。

1 例をあげれば、

Nippon Ginko など(注32)。

(3) Japan など、外国人はともかく、日本人が国号を示すのに用いるべきものではないと思われる(注33)。

これが一般には文部省が決めたものという印象を与えたらしく、今日でもよくそのときの事情をきかれるのである。

〔注31〕 これは疑問である。日本書紀は「ニホンシヨキ」というのが伝承的な読み方である。

〔注32〕 ローマ字書きと、実際の話しことばにおける発音とは必ずしも一致しない。そこにこの問題の難点の一つがある。現に日本銀行でも、その行員は「ニホンギンコー」と呼んでおり、また電車停留所は「ニホンギンコウマエ」として、以前から車掌用語として教育しているということであった(当時の市電青山教習所主任談——昭和9年2月)。

〔注33〕 Nippon が英語とならないかぎり、Made in Nippon では英文にならないのである。この点、各国とも自国語の独立性をもっていることを反省しなければならない。

なお Japan といっても、それは「日本」のひとつの読み方であって、いわば外国方言だと思えばよい(付記参照)。

〔付説〕 ジャパン (Japan) の語原について

ジャパンの語原に関する 200 年来諸家の異説について、それに論理的補正を加えて整理すれば次の 2 説となる。

(1) 北音説・ポルトガル人先称説…マルコ = ポーロの東方見聞録は、あるいは口述の筆記であるといい、あるいは覚書による他人の著作であるともいうが、ともかく版ごとに「日本国」の音訳がちがって、たとえば Zipangu, Zipangri, Gyampagu, Ghipangu, Jipangu などがあるという。いずれにしても北方音（漢音系）よみ「日本国」にもとづいている。ポルトガル人の先称説も、やはりその北音よみとポルトガルの ^{ジョーク} J のよみ方とが一致し、かつポルトガル人がいちばん早く日本に来たからというのである。この説の代表者は蘭学事始^{らんがくことはじめ}の盟主であった前野良沢である。

(2) 南音説・オランダ人先称説…「日」の音は呉音（南方音）で「ニチ」であるが、とくにカントン音では yat [yāt (Wilams) iət (Carlgren)] である。その「ヤ」をオランダ人が ^イJ の字で音訳したのであって、それを、アメリカ人やイギリス人は「ジャ」とよむのだというのである。この説は言海の著者大槻博士の提唱（日本「ジャパン」正訛^カの弁——明治 6 年 1 月号洋々社談——復軒雜纂所収）にもとづくものであるが、その中で、第一に博士が「シナ南辺の土音」といってられるのを「カントン音」と推定し、博士が「ポルトガル・スペイン・オランダ等の国人」が「その国字に転写し ^{ヤパン} Japan と通呼し」といってられるのを「オランダ人」と限定しただけが小見である。（スペイン語の AB では ^{ホーター}J で

あるから yat を J の字で転写するはずはないと思うのである——
現に Japon はハーポンである)。

以上2説のうち、今日は第1説が通説。小見は第2説。

昭和2年の第52回帝国議会に、国号「日本」の読み方を「ニッポン」に統一して、来年の天長節から実行してほしいという請願案が出た。これは政府参考資料として可決されている。その後もしばしば議会で問題になったが、昭和6年6月には神戸の小学校訓導から文部大臣に建議したり（同月26日大毎）、こえて昭和8年12月には、京都のロータリークラブで決議したり（9年1月3日大朝）、さらに3月には大阪で「ジャパン」排斥運動をおこしたり（同月3日大朝）などして、一連の「ニッポン」国号統一運動がかっぱつにおこなわれた。

このような世論の上に立って、臨時国語調査会は「ニッポン」の呼称統一案を議決したのであるが、それが昭和9年3月19日におこなわれたということについては、実はその直前（ちょうど1週間前）の同月12日に、日本放送協会の放送用語調査委員会において、かねて審議上の懸案となっていた「日本」の読み方について、ひとまず次のような暫定的決議をした事実と密接な関係がある（注34）。

放送上、国号としては「ニッポン」を第一の読み方とし、
「ニホン」を第二の読み方とする。

この決定に参加した保科（孝一）委員は、臨時国語調査会の幹

事であり、そして前記の国号呼称統一案の起案者でもあったのである。

もっとも、右の臨時国語調査会の決議が「ニッポン」を採ったのは、単に当時の世論に同調したというだけのものではなく、実は文部省が古くから教科書に「日本」^{につぽん}とふりがなして教えてきていたことに基くものであり(注35)、あるいは、こうした世論が広くおこってくるくらいに「ニッポン」の読み方が普及したことも、この教科書による長年の教育の結果であるかも知れないと思われるのである。

〔注34〕 放送用語としては、昭和8年、ロサンゼルスオリンピック大会で「ニッポン」が強いからというのでそうした。その当時はアナウンサーもニッポン、ニッポンといていたが、いつの間にかニホン、ニホンというようになったと、当時の東京放送局報道課長が述べている(放送用語調査委員会昭和29年2月6日記録)。

〔注35〕 教科書では、散文では原則的に「ニッポン」とし、韻文では音律の関係で「ニッポン」と「ニホン」とを自由に使っている。たとえば――

^{につぽん}
日本 尋常小学校読本(明治36年刊 48ページ)

ああうつくしや ^{にほん}日本の旗は 尋常小学唱歌(同年刊1年用) 日の丸の旗

7 将来統一の見込があるか

「時」が解決するもの考える。

これまでの統一運動は、わたしの知る限りにおいては、すべてニッポン論者によるものであった。そしてそれは、いつでもすぐに決めよといったようなものであったが、この問題の解決は「時」に待つところが多いものだと思う。もっとも、これまでの統一論者がそういうふうであったのもむりはないのであって、実は、そうしたところに、この「ニッポン」という発音の言語学的性格がはたらいているとも考えられるのである。

「ニッポン」と「ニホン」との言語的性格

- | | | | | |
|---|-------|------|------|---------|
| 1 | ニッポン | 2 音節 | 4 音律 | 強調的 |
| | ニホン | 2 音節 | 3 音律 | 中性的 |
| 2 | p(pp) | 破裂音 | 断音 | 唇音 呼気圧強 |
| | h | 摩擦音 | 続音 | 遍口音 |

- 3 人間の音声としては発生的に〔p〕が早い。原始的・小児的な音である。

これらの音声学的条件が総合的に反映して、心理的には次のような語感を生じる。

- | | | | |
|-------|-------|----|-------|
| p(pp) | 外的に浅い | 鋭い | 強く荒い |
| h | 内的に深い | 円満 | やわらかい |

ところで、一般に支配層は既成のおとなであったから、どちらかといえば「ニホン」説に同情がある。そこで、もしこれが「ニホン」に統一せよというのであったならば、あるいは今日とは別な結果を示していたかもしれない。

軍人勅諭の読法では、その「日本^{にほんこく}国」というふりがなによって「にほん」と一定していた。

「ニッポン」の読み方を主張する論者の間では、いやしくも「日本」という国号に二つの呼法があることは許しがたいもののよう^に考えられているらしい。が、日本語の語い面においては、音訓二重語い制度の存在することを思わなければならない。

いわゆる音訓二重語い制度とは、たとえば「山・川・草・木^{さん せん そう もく}」と「山・川・草・木^{やま かわ くさ き}」とのような漢字の音訓併用にもとづいて、そこに1物2名の事実が原則的に存在していることをいうのである。しかも、その音と訓とが必ずしも二つの異なった語原からきたものではなくて、実は古くは同一漢字の音であったものが、時代的な発音の変遷によって、語感上、音と訓とに分化したものがあ^る。たとえば「絵^{かい}と絵^え」「文^{ぶん}と文^{ふみ}」「銭^{せん}と銭^{ぜに}」「州^{シュウ}と州^ス」「奥^{オウ}と奥^{オク}」などのようなものである。そして、それと同じ現象が熟字の上にあ^らわれたのが「文字^{もんじ}と文字^{も じ}」「日本^{にっぽん}と日本^{に ほん}」などの例であ^って、すなわち「文字^{もんじ}」や「日本^{にっぽん}」は音（漢語）にあ^たり、「文字^{も じ}」や「日本^{に ほん}」は訓（すなわち「やまとことば」的なもの）にあ^たると考えてよいのである。

けだし「ニホン」は、今日ならばしぜんに「ニッポン」と読まれるべき「日本」の読み方を、昔（少なくとも平安朝）の時代的発音法にもとづいて、自然に「ニホン」と読んだところから起ったものである。それが、その後（ローマ字書きのある室町時代と思えばまちがいない）に起った「ニッポン」という読み方とともに

伝えられて、これを現代の言語生活の中で併用してみると、そこに一般の音対訓、漢語対和語的な語感上の関係を生じて（注36）、そして、そのどちらもが生きて働いているというのが今日の実態なのである。そこで、わたしたちは、なによりもまずこの「ニホン」と「ニッポン」との二つの読み方を、現代日本語の音訓二重語い制度の中において、そのどちらをも平等の存立として認めるということがたいせつである（注 37）。そうした上で、あらためてこの問題を慎重に考察してみるがよいと思うのである。

〔注36〕 それについて想起することは、現行の観世流謡曲「白楽天」および「善界^{ぜがい}」において、日本人には「にほん」と読ませ、中国人（白楽天・てんぐ）には「にっぽん」と読ませていることである。この意識的な読み分けをいつごろからはじめたかは未詳であるが、ともかくそこには「ニホン」の和国的・和語的な語感に対する「ニッポン」の異国的な語感を利用していることが看取されておもしろい。

もっとも、間の狂言^{あい}では所作にあわせて「ニッポン」とも「ニホン」ともいうので、とくに和漢の人によって発音し分けることはない、大蔵流の先代山本東次郎氏から、白楽天のそれを所作の実演入りで読んできかせてもらったことがある（昭和9年2月）。

謡曲「白楽天」にあらわれる日本人は漁翁（実は住吉明神）と漁夫とである。また「善界」にあらわれる日本の天ぐは太郎坊で、大唐の天ぐの首領善界坊^{ぜがいぼう}なるものは、あるいは世界坊と

いう意味の名であるかも知れないと解釈してみると（私見の1語原説），いっそう，その間の消息を感得するであろう。ちなみに善界^{ぜがい}は是害^{ぜがい}とも書くが，世^ぜは世阿弥^{ぜあみ}の世^ぜで一種の古音である。

謡曲「善界^{ぜがい}」の出典は今昔物語で11世紀なかばのものであり，はやく「ゼガイ」の語原は忘られたとし，サ行の古音に濁るばあいが少なくなかったことは，今日でも雅楽用語で和琴^{わごん}の弦を三（ザン）四（ジ）と呼ぶことによっても考えられる。また正三位^{じようざんみ}という有職^{ゆうそく}よみも宮内省には残っていた。

〔付記〕これはニホンとニッポンとの問題ではないが，先年 Japan を廃して Nippon を世界に向かって主張せよという論があったときに，ロンドンタイムス・ニューヨークタイムスの東京特派員ヒュー・バイアス氏は「ニッポンよりジャパンがよい」という意見を新聞で発表した（昭和9・4・9東日）。その論旨は：

第1に，英語の発音では Nippon の Ni- が Japan の Ja- に比較して弱いということ。

第2に，英語において Nip- という音の連想が卑小であるということ。たとえば動詞の nip をはじめ，nip- のつく名詞など（英和辞典を見よ），新刊のショーター・オクスフォード辞典には1らん半もあるが，そのうち一つとして卑小の連想をもたないものはない。かくして Japan と Nippon, Japanese と Nipponese, ないしは Jap と Nips など，その後者は世界

の漫画家を喜ばしめるにじゅうぶんである。

これに反して Japan の音感は幅が広くて一種の感激をもっている。だから Japan の称呼を排撃して Nippon を主張するのはよくないというのであった（この論の全文が奥間徳一氏の「大日本国号の研究」（昭和 10 年刊）に転載されている。

〔注37〕 将来、いずれか一つを公式の称呼として採用したところで、わが日本語の 1 性格としてそなわっている音律的単位の関係上、それだけを絶対的なものとして他を厳禁するということとはできないと思う。

最後に一言すべきは「日本」のローマ字書きについてである。それは Nippon Ginkō をはじめ、いろいろな会社・団体で、実際の発音および電信などのかながきでは「ニホン」であるが、ローマ字では Nippon と書くというのが比較的が多いことである（昭和 9 年 2 月の調査による）。もちろん Nihon と書く会社名も学校名もあるが、それは Nihon よりも Nippon のほうが書く上では根づよい習慣をもっているということである。これは口ことばでも改まってきかれると「ニッポン」ということが多いのと一脈相通じるものがある。つまり音声でも書記の上でも緊張すれば「ニッポン」となる傾向があるらしい。

最近にもこういう質問があった。

戦争中は「ニッポン」だったが、戦後、平和国家になったので「ニホン」と改称されたということであるが、それはいつ発

表されたものであるか。

いや、そういう事実はないと答えたわけであるが、とにかく「ニホン」と「ニッポン」との間にそうした語感のちがいがあることは、この素朴な質問のうちにもあふれている。

* * *

以上、尽きるところなき問題の中に、現今教科書の中で「日本」とあるのはなんと読ませたらよいのであるか。

国家的な決定がまだないかぎり、明治以来の文部省の教科書に見えているふりがなにもとづいて、とくに韻文的音数の関係がなかぎり、いちおう改まっては「にっぽん」と読んでおくという従来の方針に従っておくのが妥当な態度であろう。ただそのさい、これを絶対的な読み方として、歴史的な「ニホン」の読み方を否定するような態度をとってはならないことはあえていうまでもない。それと同時に、これらの子供が大きくなったところに、その「時」における日本人の国語生活の全体的な背景と基盤との上に立って、この一つの問題についても、自然に最善の解決をもたらすものがあるのではないかと思われる。

最後に、この小稿を草するにあたってさまざまな著書・論文から教えられたことを感謝いたします。